

Kビジョン放送番組審議会（2016年3月24日）

放送番組審議会（第18期第2回会合）では、『けーぶるにっぽん・技 JAPAN～笑い×オートマタ×挑戦』、『特別番組 切山歌舞伎～伝統を未来へ伝える～』を合評しました。

<合評番組>

■けーぶるにっぽん・技 JAPAN～笑い×オートマタ×挑戦（26分）

2016年1月18日～1月31日放送

Kビジョンが加盟している一般財団法人・日本ケーブルテレビ連盟が主催するプロジェクト「けーぶるにっぽん」シリーズに初参加した作品です。取り上げた題材は、西洋からくり人形といわれるオートマタ。光市出身で、現在は山口市で活動しているオートマタ作家の原田和明さん取材しました。原田さんは、世界でも数少ないオートマタ作家の一人で、数々のユニークな作品を作り出すことでも知られています。番組では、世界からも注目を集める原田さんの作品の魅力と、それを生み出す原田さんの人柄に迫りました。番組制作には、次世代映像フォーマットである4Kで撮影を行い、より鮮やかな色合いや映像で表現しています

■特別番組 切山歌舞伎～伝統を未来へ伝える～（29分）

2016年1月1日～3日放送

「切山歌舞伎」は下松市切山地区に江戸時代中期から伝わり、250年以上の歴史を持つ伝統芸能です。山口県無形民俗文化財に指定され、40年前からは地元青年団を中心に保存会を結成して保存継承活動に取り組んでいます。その地道な活動が評価され、昨年11月に文部科学大臣表彰を受賞しました。担い手の高齢化が進み、後継者の育成が課題となる中にも、最近は若手の会員が加わり、昨年からは定期公演を始めるなど活動も活発になっています。番組では2014年秋から1年間にわたって、会の郷土芸能を守り伝えようとする姿を追いました

<合評内容>

■ けーぶるにつぼん・技 JAPAN～笑い×オートマタ×挑戦

- ・ 4Kカメラで撮影しているだけに映像がきれいだと感じた。番組を見て、原田さんがどういう思いで作品制作に携わってきたのかを細かくカット割りして、いろいろなところでインタビューしているのに好感が持てる。こうした労力を惜しまずにインタビューをすることの意味は何かを考えていることが感じられる。極めつけは原田さん夫婦へのインタビューで、原田さんの子どものような無邪気さはもちろんだが、妻の原田さんを理解している様子がさりげなく入っていて、番組を通して夫婦の人間関係の良さが表れている
- ・ 光の石をテーマにした作品づくりの中で、悩みながら制作するシーンを入れてほしかった。また、友人など周りの人たちから見た原田さんについての話も聞いてほしかった
- ・ Kビジョンが人物をテーマに制作するドキュメンタリー番組は、演出のクオリティーも高く、地上波局が制作する番組との違いを感じないくらいだと思っている。同時に紹介する素材の良さについてもクオリティーが高いと感じた。手間を惜しまずに素材を取り上げ、番組づくりをしている点は、Kビジョンの良いところであり、これからも伸ばして行ってほしいし、全国で放送できる番組を作って行ってほしい
- ・ 番組の冒頭で光市の紹介が出てくるが、何かものづくりと関連づけた紹介ができると、番組のまとまりが出たのではないかと感じた
- ・ 音もよく、オートマタがカタカタという音が番組の中で効果的に使われ、雰囲気を出していた。地方から世界に目を向けている人を紹介することは、どんなところからでもグローバルに発信していける気持ちを見せることにつながり、若い人への刺激にもなったのではないかと感じた
- ・ 今回の番組で原田さんのことを初めて知り、興味深く見た。番組を通して、夫婦が同じ方向に向いて取り組む姿が良く捉えられていると感じた。どのようなきっかけや狙いで取り上げようとしたのか

等のご意見をいただきました。

■特別番組 切山歌舞伎～伝統を未来へ伝える～

- ・練習の様子が少なく、本番ではいきなり上手に演じたように紹介しているのが気になった。途中の特訓の様子などを入れてほしかった。切山歌舞伎の守るべきところ、伝えるべきこだわりや頑固さを伝えるシーンがあるとよかった。他の保存会から見た切山歌舞伎の反応や意見、定期公演の地元の来場者の感想といった外部からの意見が入ると、番組として重みが出る
- ・伝統芸能を取り上げた番組は、上演の映像を取り上げるものが多い中で、人物を中心に据えたことで、まちの中に歌舞伎があり、その中にさらに歴史、幅広い年代の人が描かれていると感じた。客観的に見ると、やや欲張りすぎた紹介と感じる点もあった
- ・歌舞伎を伝えていかなければいけないという地域の人たちの思いは感じたが、なぜ残したいのかという背景や、どうして若者たちが関わっていったのかといった経緯なども知りたいと感じた。ちゃんとした答えは出ないかもしれないが、番組を見て感じてみたいというもどかしい気持ちもあった
- ・今回の番組を通して一番の成果と感じたのは、子ども歌舞伎を見た小学生が「今度は本物の歌舞伎を見てみたい」と話したことで、保存会が伝承していきたいという思いが伝わったのではないかと感じた。地域は伝統や歴史がなくなると、過疎化が進むが、それは地域のプライドが失われることを意味している。番組を一話完結型でなく、次につながるストーリー的な終わり方で構成するとさらによかったのではないかと感じた
- ・切山歌舞伎をはじめ、各地にはさまざまな伝統芸能が残っている。こうしたことの意義を感じると同時に、各地の伝統芸能での共演が実現するとよいのではないかと感じた等のご意見をいただきました。

出席者は、末岡泰義委員長、なかはらかぜ、原田幸雄、増野睦子、小田佳希の各委員、社側から長尾一郎代表取締役社長、杉田昌士専務取締役、他放送制作部員5名でした。